

<書評>

原口剛 著
『叫びの都市 寄せ場、釜ヶ崎、
流動的下層労働者』

(洛北出版 判類：46判 総頁数：410頁 発行年：2016年 定価：2400円＋税)

澤井 久実

釜ヶ崎を研究したいと大学院の門を叩いて以降、フィールドワークと並行して、それに準ずる貧困問題、都市問題、ホームレス問題、支援者と現場の関わりおよび居場所論など様々な書籍に当たってきた。そのなかで、度々目にする著者の名前。著者は、2000年より釜ヶ崎地域の研究を継続してきており、当該地域研究者のなかでは中堅の代表格の一人といえる。共編著である『釜ヶ崎のスヌメ』という書籍での活躍が目覚ましいと思われるが、本書はジェントリフィケーションに抗するという筆者の研究目標への導入書であり、なおかつ暴動時を整理した歴史的書物と位置づけることができる。釜ヶ崎の存在を知らずにいる、または暴動の時期に生まれていなかった世代にとっては、貴重な図書になることだろう。

本書の目次の概略は、以下のとおりである。

序章 アスファルトを引き剥がす

第1章 戦後寄せ場の原点 大阪港と釜ヶ崎

第2章 空間の生産

第3章 陸の暴動、海のストライキ

第4章 寄せ場の生成 (1) 拠点性をめぐって

第5章 寄せ場の生成 (2) 流動性をめぐって

終章 地下の都市、地表の都市

本書の目的は釜ヶ崎で暴動が起こった当時の記憶を留め、資本の眼にはたやすく映りこまないような、重層的な深みを描くことである。その内容は、釜ヶ崎がいかんにして例外化され、特異化されたのかという過程に重点が置かれている。釜ヶ崎は、暴動をはじめとして、労働と生存をめぐる数々の闘争が積み重ねられてきた土地である。日雇労働者たちや活動家たちは、いかなる闘争を繰

り広げ、どのようにして自らの空間を生みだしていったのかを記述している。

第1章では、高度経済成長の只中1950年代半ばから60年代の大阪港を対象に、労働を担う者がどこから供給されていたかを明らかにしている。港湾労働は時期によって荷役の量が大幅に増減する特徴があり、これを筆者は「波動性」という言葉で表している。この波動性ゆえに、港湾運送業では重層的な下請け構造が形成され、構造の最下層に位置づけられているのが日雇労働者たちである。経済成長をひた走る中で、大阪湾岸一帯に飯場が濫立され、釜ヶ崎のドヤにさらに予備的な労働力を確保するというかたちで、日雇労働力の供給経路が地理的に配列されていった。釜ヶ崎の特徴とされる飯場や手配師が活用されるに至った背景には、港湾・海運資本に対し柔軟かつ迅速な労働力を供給する合理的な労働力供給システムを実現していたことがあると国策と資本の矛盾を突いている。そのような状況下で、釜ヶ崎の日雇労働者は、この矛盾を背負わされた存在だとし、釜ヶ崎という特定の空間において、例外として「公認」^{あいたい}することで外部化され、封じ込められたと描く。戦後の労働法では相対方式^{あいたい}の契約は禁じられていたが、港湾資本にとっては日雇の労働力が必要であったため解消されず残っている。

第2章では、釜ヶ崎が暴力や監視で統治され、「西成」イメージが形成されるまでの歴史を細かく辿っている。1950年代後半には「釜ヶ崎＝スラム／山王・東田町＝暴力」というフレームが成立しており、それを一括する表現として区名である「西成」が流用される。これがマスメディアによって暴動やそれへの対策の地として、地名が広くまき散らされることにより否定的な場所イメージが拡散されていく。その後、負のイメージ抹消のために「あいらん」という新しい地名に置き換える戦略がとられた。「あいらん対策」と呼ばれる一連の制度的実践は、1961年の第一次暴動以前の時期、61年～66年までの暴動の最盛期、66年の「あいらん地区」指定以降の時期と三分区できるが、それぞれの段階を経るに従い、大阪市から大阪府、そして国家へと指導者が変転し、それは同時に釜ヶ崎への視点と論理の変化を伴うものであった。一区分期では家族の貧困問題に焦点が当てられスラム対策がとられ、二区分期では治安問題も唱えられ家族を釜ヶ崎から分散させるような対策がとられた。そして三分期には、釜ヶ崎問題がローカルな課題ではなく国家の介入を余儀なくされるまでに至り、日雇単身労働者の街へと舵を切るようになった。

第3章では、大阪湾のストライキと釜ヶ崎で起こった暴動から、前者が常雇の港湾労働者たちで日雇労働者との間には分断線があったが、港湾で勝ち取られた成果は釜ヶ崎の立ち呑み屋で語られ、次第に集団性を獲得していくようになる過程が描かれている。しかし、70年代後半の予期せぬ機械化のためにこの労働運動は尻すぼみになり、そして寄せ場の産業構造が建設業へと急展開を見せる。1980年代以降の新たな文化景観の建設は、記憶のリストラクチャリングの過程でもあった。レジャー施設を「天保山」と名づけることで、以前の土地のイメージを払拭し、築港と釜ヶ崎は実態においてもイメージにおいても完全に分断された。

第4章では、本章の核ともいえる暴動とは何であったかについて記述されている。釜ヶ崎においては、61年の第一次暴動以来、24回暴動が勃発している。

表1 釜ヶ崎暴動の発生時期

年	月 日	各暴動
1961	8月1日	第1次暴動
1963	5月17日	第2次暴動
	12月31日	第3次暴動
1966	3月15日	第4次暴動
	5月28日	第5次暴動
	6月21日	第6次暴動
	8月26日	第7次暴動
1967	6月2日	第8次暴動
1970	12月30日	第9次暴動
1971	5月25日	第10次暴動
	6月13日	第11次暴動
	9月11日	第12次暴動
1972	5月1日	第13次暴動
	5月28日	第14次暴動
	6月28日	第15次暴動
	8月13日	第16次暴動
	9月11日	第17次暴動
	10月3日	第18次暴動
	10月10日	第19次暴動
1973	4月30日	第20次暴動
	6月14日	第21次暴動
1990	10月2日	第22次暴動
1992	10月1日	第23次暴動
2008	6月14日	第24次暴動

(出典) 本著221頁掲載

第一次暴動のきっかけは、ひき逃げされた日雇労働者に対する警察の処遇であった。この暴動は警察に対する抗議行動であり、日雇労働者の自律的な共同性や集合性が発露されたものといえる。暴動は暴徒化ではなく、一定の倫理が潜んでいたのである。60年代末以降、この暴動のエネルギーを原動力としつつ、釜ヶ崎の地に日雇労働運動が胎動していく。警察本部長自らが、警察力というムチだけでは暴動を抑えることはできず、失業保険や健康保険の加入増などのアメの対策がなくては統御できないと認めるほどであった。

全港湾西成分会と暴力手配師追放釜ヶ崎協議会（釜共闘）の日雇労働者の捉え方の違いから、元は一緒の活動体であった両者が路線を分かつことになる。前者は、日雇労働者も労働者階級の一員であると考えのに対し、後者は、労働者一般に包摂されない固有の存在であると説き、流動的下層労働者という名を与えることで固有の階級的存在をあらわにした。以降、釜共闘は合法か否かを問わない直接的エネルギーを行使し、空間を領有していく。釜共闘自体は短命であったが、勝ち取ったもの（夏祭りや炊き出しなど）は釜ヶ崎固有の政治文化として今なお受け継がれている。

第5章では、「寄せ場の労働者になるとは」と題され、I氏の流動的な個人史がたどられている。それに続いて、複数の寄せ場についての記述があり、流動的下層労働者の運動が飛び火する流れが描かれている。ここで見過ごしてはならないことは、これらの運動の展開が、ドヤ街という拠点が決われる最中であって再現されたという事実である。飛び火する闘争は、その過程が進むほどに、それら複数の場所（東京の山谷、横浜の寿町など）を一言で指し示し、共約しうるような「寄せ場」という概念を結晶化させていった。

終章は、ジェントリフィケーションに対する本書の効用を示した箇所である。社会の総寄せ場化という概念が出てくるが、これは仕事を探す経路が寄せ場での対面方式から携帯電話での登録に切り替わったことから成る。または「デジタル寄せ場化」とも唱えられるが、意味するところは労働者たちを特定の地点にとどめておかねばならないという場所の縛りから資本が解き放たれたということである。このような状況下で、釜ヶ崎の社交性とよばれる、路上や居酒屋での情報交換の機会が失われたことを筆者は危惧している。

2000年代は公共空間をめぐる占拠闘争の時代であったと説く。野宿者たち下層労働者たちは、ジェントリフィケーションというむき出しの敵意にみちた浄化に立ち向かわなければならない。全国の寄せ場を渡り歩いてきた寄せ場の労働者にとっては、流動の自律性や力能が奪われることは死を意味する。だからこそ問われるのは、私たち自身の叫びの能力である。過去からの声に耳を傾けることに、都市に寄せ場を取り戻す可能性は賭けられていると筆者は締めくくる。

本書の意義は、寄せ場を生きた無数の、無名の労働者たちの熱い軌跡から、労働者として今を生きる術を手繰り寄せる手がかりを示したことがまず一点挙げられる。手がかりとは、労働者が連帯し自らの権利を主張することである。筆者は、2008年の釜ヶ崎暴動および大阪市内の各公園テント村の強制排除を目撃した経験がある。これらを背景とした筆者の問題意識は切実である。釜ヶ崎に一番活気があった暴動期を知らない世代にとっては、釜ヶ崎史を学ぶ一資料としても大変貴重な著書である。様々な研究者や活動家の著書・論文を紹介し、この一冊を読むだけで釜ヶ崎研究の概要を網羅することができる。

そして、これまでの釜ヶ崎研究の中にジェントリフィケーションの概念から西成特区構想以降激変の渦中にある釜ヶ崎を検証し直している点が新しい。暴動が労働者の異議申し立てであった事実から、釜ヶ崎へと排除され困り込まれた労働者が、今度は釜ヶ崎からも排除されつつある現在を大変危惧している。このことについては、スミス（2014：175）も「ジェントリファーとして参入する人々とそれによって立ち退かされる人々とがきわめて明確に分極化されているという事実から、目を背けるべきではない」と唱えている。

筆者の釜ヶ崎研究は新たな一步を踏み出した訳だが、ジェントリフィケーションの波に抗して変わっていない街で何をしたいのか、今後の釜ヶ崎をどういった街にしていくのか、その将来像が描かれていない。現在の釜ヶ崎は、現役層（労働によって生計を立てる人々）よりもそうでない層（生活保護受給者や介護施設利用者）が大多数を占めているが、なぜ労働者らに焦点を当てるのか。釜ヶ崎の歴史を引き継ぐのはこの労働者層の人々だけであるが、なぜ少数派にしか目を向けることがないのか。むしろここに釜ヶ崎史の変遷を見ることが出来るのでないだろうか。平成時代の釜ヶ

崎で、誰が何に対応するかが問われるべきであると考える。かつての寄せ場のような連帯の拠点さえ奪われた労働者たちは、いかに抵抗し欲求を叫べばよいのか。

以上のような課題を持ちつつも、今後釜ヶ崎をフィールドにする者、労働問題や都市問題研究を志す者にとって本書は必読の文献になると思われる。筆者のこれまでの研究および問題意識が詰まった良書である。

[注]

- 1) 求職者と求人者が直接に労働力の売買を取引する形態のこと。

[文献]

- 原口剛, 2003, 「『寄せ場』の生産過程における場所の構築と制度的実践-大阪・『釜ヶ崎』を事例として」『人文地理』, 55(2): 121-43.
- , 2008, 「都市のイマジニアリングと野宿生活者の排除 —1980年代以降の大阪を事例として(民際学特集)」『龍谷大学経済学論集』, 47(5): 29-46.
- , 2010, 「寄せ場『釜ヶ崎』の生産過程にみる空間の政治—『場所の構築』と『制度的実践』の視点から」青木秀男編著『ホームレス・スタディーズ—排除と包摂のリアリティ』ミネルヴァ書房, 63-106.
- Smith, Neil, 1996, *The New Urban Frontier: Gentrification and the Revanchist City*, London: Routledge. (=2014, 原口剛訳『ジェントリフィケーションと報復都市—新たな都市のフロンティア』ミネルヴァ書房.)

大阪市立大学大学院文学研究科 前期博士課程 人間行動学専攻社会学専修

さわい くみ

m161bm0202@st.osaka-cu.ac.jp